



ミイラマスク／プトレマイオス朝時代

P.2 **企画展** 令和6年4月6日(土)～5月12日(日)

日本海新聞創刊140周年記念事業

古代エジプト美術館展

P.3 **企画展** 令和6年6月29日(土)～8月25日(日)

アートって、なに？ ～ミュージアムで過ごす、みる・しる・あそぶの夏やすみ

P.4 [自然] コラム 印象化石 —化石本体がなくなった「跡」—

P.5 [人文] 資料紹介 鳥取藩の特注品 御菩薩池焼と仁清手

P.6 [美術] コラム 美術館のオープンに向けたふたつのプログラム “長一祭りの準備プロジェクト”と“しあわせのかたち”

P.7 [学習支援] コラム 博物館と学校を「つなぐ」—博学連携イベント“教員のための博物館の日”

P.8 開催告知 特集展示「鳥取藩池田家・姫君の婚礼道具」
報告 全国博物館大会で博物館活動奨励賞を受賞しました



企画展

日本海新聞創刊 140 周年記念事業

古代エジプト美術館展

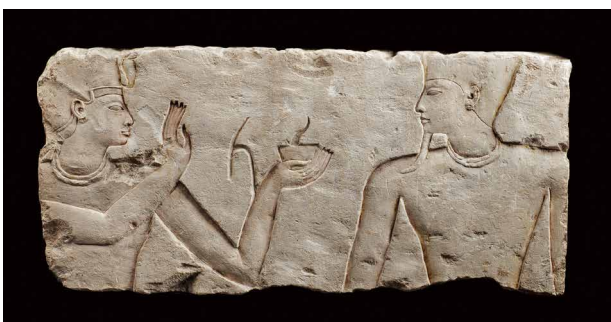
令和6年4月6日(土)～5月12日(日)

(主催) 新日本海新聞社、鳥取信用金庫、古代エジプト美術館 渋谷
(共催) 鳥取県立博物館

昨年春、エジプトのクフ王のピラミッドの内部に長さ30m以上の巨大な空間が見つかったというニュースは記憶に新しいところでしょう。このように近年のめざましい調査成果により、多くの人々の関心と呼ぶ古代エジプト文明ですが、東京の渋谷には2009年に日本初の古代エジプト専門美術館としてオープンした「古代エジプト美術館 渋谷」があります。これは中近東の古美術収集家として知られる石黒孝次郎氏など著名な所蔵家たちの旧蔵品をベースとした国内第一級の内容を誇るコレクションであり、一般公開を行っているものとしては東アジア最大のコレクションとなります。

現在、この貴重な所蔵品を初めて館外で大規模に公開する巡回展が行われており、この4月からはいよいよ当館にて開催の運びとなりました。選りすぐりの200点を公開する山陰では初となる企画展です。ここではその一部を少しだけ、時代背景と併せてご紹介します。

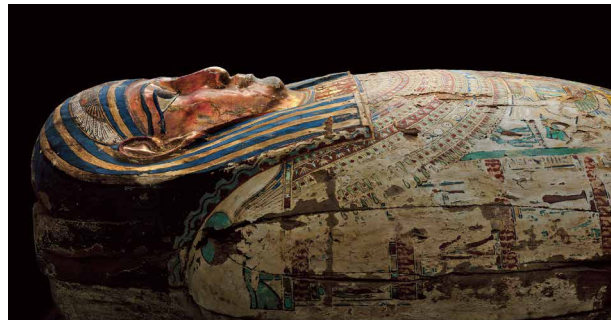
古代エジプトは一時期、一神教への改宗を試みた時期もありますが、基本的には多くの神が宿る多神教の国でした。こうした神々の姿が彫像や神殿のレリーフなどに残されています。このような神々の庇護のもと古代エジプトを統治したファラオ(国王)もまた、国を支えた高級官吏とともに彫像やレリーフとして今日までその姿が伝わっています。



王とアトゥム神のレリーフ/第3中間期・第22王朝

一方、古代エジプトの人々は死後の再生を信じていたため、亡骸をミイラにして保存しました。墓に納められた豪華な副葬品は、全て来世に再生したのちの生活で使うためのものでした。本展ではこうしたファラオの像やレリーフ、そしてミイラやそのマスク、人型木棺等を展示します。

そのほか衣食住に関わるものも数多く展示します。中でも壺や化粧用の容器をはじめ、ツタンカーメンの



人型木棺/プトレマイオス朝時代初期



花をモチーフにした胸飾り/新王国時代

名が記された指輪や美しい胸飾りといった装身具などは当時の暮らしぶりを今に伝えています。

また、ギザの三大ピラミッドが建造される直前の王の墓地であり、過去100年間学術調査がほとんどなされてこなかったメイドゥム(マイドゥーム)遺跡の近年の調査の様子も紹介します。

このように本展は、古代エジプトの信仰、ファラオ、ミイラ、衣食住といったことを幅広く紹介していますので、家族連れで楽しんで見ていただける内容となっています。古代エジプト3000年の歴史に触れることのできる、またとない機会をお見逃しなく。

こやまひろかず
(学芸課 小山 浩和)

- 休館日: 4月8日(月)、15日(月)、22日(月)
- 観覧料: 一般/1,500円(前売・20名様以上の団体/1,200円)
※大学生以下・学校教育活動での引率者・障がいのある方・難病患者の方・要介護者および介助者1名は無料
- 関連イベント
- 菊川匡氏によるギャラリートーク 4月6日(土) 10時～11時
- 学芸員によるギャラリートーク 会期中毎週日曜日14時～
- 砂で作ろう!ピラミッドやツタンカーメン 4月13日(土)・14日(日) 14時～(要申込)
- 記念講演会「古代エジプト美術館展から読み解く古代エジプト文化—神話・神々・信仰—」 4月20日(土) 14時～15時30分(要申込)
- 子ども向けヒエログリフ体験講座 4月21日(日) 10時30分～12時(要申込)
- あなただけのシャブティを作ろう! 4月21日(日) 14時～16時(要申込)



企画展

アートって、なに？

～ミュージアムで過ごす、みる・しる・あそぶの夏やすみ

令和6年6月29日(土)～8月25日(日)

(主催)アート展実行委員会

日本の成人式では毎年のように、若者たちが着る派手さを極めた破天荒な和装が話題になります。それらに「晴れの場にふさわしくない」と眉をひそめる人たちもいますが、近ごろではそれが、和装の伝統性と自由なアートの発想とをミックスした新しい自己表現として注目され、海外のファッション業界でも評価されているといった報道がありました。また、海外のビジネス領域では近年「美意識」が重視され、例えば英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アートがエグゼクティブ教育コースを開設し、多国籍企業が幹部候補職員を送り込んでいる事例もあると聞きます。このように、これまでアートという文脈で言及されることのなかった様々な領域で、アートが一つの飛躍のきっかけや、課題解決の指針となっていくという現状があります。

このことは、アーティストが持つ創造性に着目し、既成概念に囚われない自由な思考法＝いわゆる「アート思考」で社会にイノベーションを起こすといった、現代の社会的要請とも関係があるでしょう。しかし、そのように目的主義的にアートの役割といったものを設定してしまうと、その目的に沿わないイベントを排除したり、アートそれ自体が持つ豊かさを共有するという発想から離れてしまうことも想定されるのではないのでしょうか。むしろ現代の状況が示しているのは、私たちの社会や生活はもともと、アートとは切っても切り離せないものだったということではないのでしょうか。それは、フランスの社会学者・哲学者で、名著『遊びと人間』で知られるロジェ・カイヨワが指摘した、人類の全ての文明や文化において「遊び」が重要な役割を果たしてきたという構造と、どこかで繋がっているようにも思えるのです。

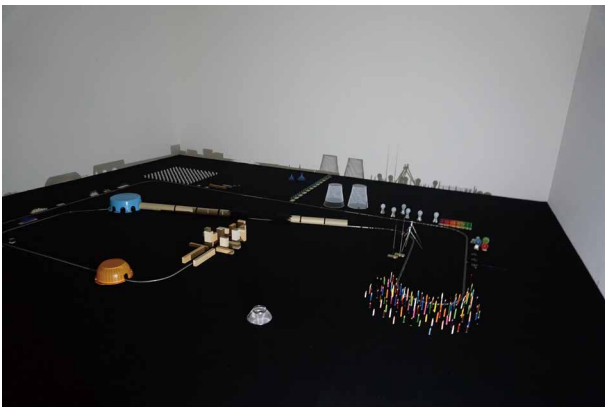


写真1：平成29年度テーマ展示 I 「夏休み企画 Art Diving」展示会場
クワボリョウタ《10番目の感傷(点・線・面)》



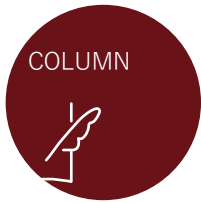
写真2：令和5年度企画展「ミュージアムとの創造的対話04 ラーニング/シェアリング」
展示会場(小沢剛+ヤギの目)

さて、新しい県立美術館の開館までいよいよ一年を切りました。当館ではこの夏、家族連れでもっと気軽にアートを楽しみたいと思っていた方々や、これまでアートに何となく距離を感じていた方々などに向けて、自由に会場をめぐることで、知らず知らずのうちにアートの世界の広がりやおもしろさに出会うことのできる体験＝展覧会をお届けしようと、いま美術分野のスタッフ皆で準備をしているところです。

当館ではこれまで、ときに動きのある、或いは親しみやすさと批評性が融合したような、「これってアートなのか」という問いが来館者の中に浮かび上がるような展示を行ってきました(→写真1および2)。そしてそれらについては、「これまで見たことがない楽しい作品だった」「アーティストの発想の深さと独創性を感じた」との声が来館者から届いています。この夏の展覧会では、そういった当館の美術部門が50年以上の歳月のなかで展開してきた多岐にわたる活動を踏まえて、当館が所蔵する美術作品や、国内外で活躍する注目作家の作品などを、多様な切り口を設定して紹介します。会場をめぐる人々は、五感を総動員しながら、予備知識の有無にかかわらず、それぞれの視点でアート、そして美術館という場所のおもしろさや意味を実感できるようにしたいと考えています。本展によって、これまで美術館に敷居の高さを感じたり、強い関心を持っていなかった方々の中にも、新しい県立美術館への期待感が芽生えることを願っています。

(美術振興課 みうら つとむ 三浦 努)

- 休館日：7月29日(月)
- 観覧料：一般/1,000円
(前売・20名様以上の団体・大学生・70歳以上/800円)
※高校生以下・学校教育活動での引率者・障がいのある方・
難病患者の方・要介護者等及びその介護者は無料
- 関連イベント 会期中には、企画展関連イベントを開催予定です。



コラム

印象化石

—化石本体がなくなった「跡」—

印象化石とは

恐竜の骨やアンモナイトの殻など、生き物の体が化石となったものを「体化石」といいます。体化石は何らかの要因で地層中からなくなってしまうことがあり、この時残された「跡」が地層の中に「型」として保存されることがあります。これを「印象化石」といいます。本体こそなくなっていますが、その生き物の骨や殻などの硬組織はもちろん、体化石としては残りにくい筋肉や神経など軟組織の形態が保存されることもある、重要な化石です。

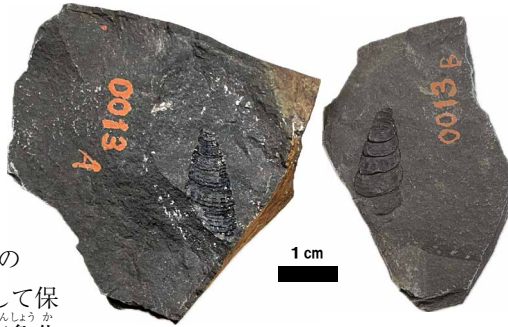


写真2. オニツノガイ科の一種の印象化石 (八頭郡若桜町つく米産)。左:雌型,右:雄型,当館自然常設展示室。



写真3. イタヤガイ科の一種の印象化石 (八頭郡八頭町明辺産)。左:雌型,右:雄型,当館自然常設展示室。

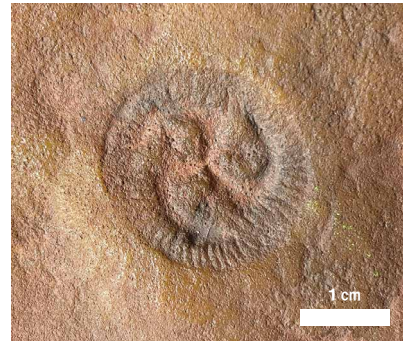


写真1. トリブラキディウムの印象化石,雄型,レプリカ。(オーストラリア産)。エディアカラ紀(約6億年前)の硬組織をもたない原始的な絶滅動物で、軟組織の印象化石がみつかつている。当館所蔵。

どのようにしてできるのか？

体化石本体が地層中からなくなってしまうのにはどのような要因が考えられるのでしょうか。

まず、生き物の体が石化する前に腐ったり分解されたりして形を失い、跡だけが残る、ということが考えられます。

また、「熱」も要因として考えられます。例えば、地層の近くにマグマだまりが形成されるなど、体化石を含む地層の近くに熱源が現れるとその地層は熱され、含まれている化石が溶けてしまうことがあります。

ほかにも、「地下水」の影響も考えられます。例えば、脊椎動物の歯や骨をつくるリン酸カルシウムや貝類やサンゴ類の殻をつくる炭酸カルシウムは、酸性の地下水が地層に浸透してしまうと、中に含まれる体化石が溶けてしまいます。

「雌型(モールド)」と「雄型(キャスト)」

印象化石は、体化石の跡が保存されたものを「雌型(モールド)」(図A, D)といい、体化石本体がなくなった空所を別の成分(例えば砂や泥など)が充填したものを「雄型(キャスト)」(図B, C)といいます。印象化石を採集するときは雌型と雄型の両方を採集することが望ましいです。しかし、壊れてしまったり、そもそも片方しか見つからなかったりと、雌型と雄型のどちらか一方しか採取できないこともよくあります。

雌型の場合は「跡」が印象として残っている状態なので、粘土(歯科用印象剤など)や液体シリコンなどで「跡」を充填することで化石本体の形態を復元することができます(写真4)。

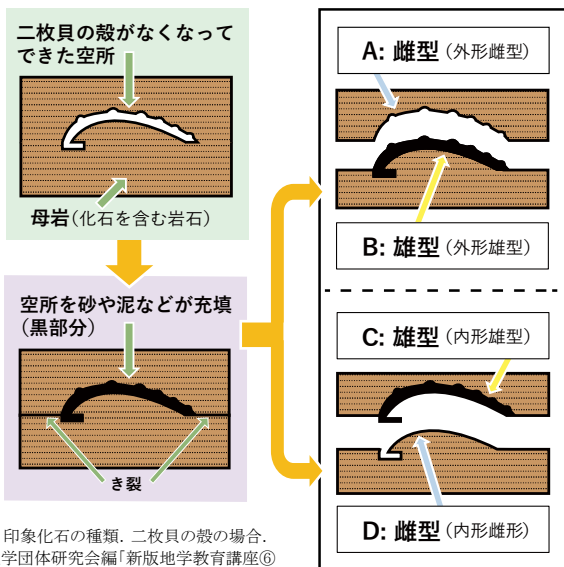


図. 印象化石の種類。二枚貝の殻の場合。(地学団体研究会編「新版地学教育講座⑥化石と生物進化」(東海大学出版)などを参考に作図)。

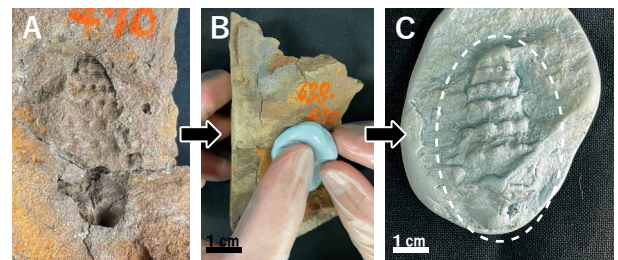


写真4. 印象化石から化石の形態を復元する行程: A: 使用した雌型(外形雌型)の印象化石。(ピカリア属の一種,八頭郡若桜町妻鹿野産)。B: 雌型から歯科用印象剤を使用し雄型を作成している様子。C: 復元した雄型。

印象化石は周りの岩石と色味が似ていることがほとんどで、見逃してしまうこともあります。しかし、保存の良い印象化石は微細な構造まで観察ができるほどで、その美しさは体化石本体に引けを取りません。化石の「跡」、探してみたいはかがでしょう。

(学芸課 田邊 佳紀)



資料紹介

鳥取藩の特注品 御菩薩池焼と仁清手

色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文菊皿 図1-1



図2-2 側面(銅)

当館では、令和3、4年度にかけ、鳥取藩主池田家の家紋のある「色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文菊皿」(図1-1)と「色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文皿」(図2-1)の2点を収集しました。収集の過程で、近世京焼研究の第一人者・岡佳子氏に調査を依頼しました。今回は、岡氏の所見を参考に、新収蔵のやきもの2点について紹介します。

「色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文菊皿」(以下、色絵菊皿)は、口径143mm、高さ40mmを測り、菊型の押し型を用いた轆轤整形皿です。皿の内側に「古清水」特有の金・青・緑の色絵具で絵付けされた松竹梅と藩主の家紋「丸に揚羽蝶」の文様を持ち、口鏤を廻し、外側面は菱形の渦巻き文様である雷文となっています(図1-2)。また、裏には「御菩薩」の印が押されています(図1-3)、京都では17世紀後半の出土品に見られるものです。これらの特徴から色絵菊皿は17世紀後半に京都の洛北深泥池畔(京都市北区)で制作された「御菩薩池焼」であることがわかりました。

色絵菊皿に同伴する「色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文皿」(以下、色絵磁器皿)は、肥前有田(佐賀県有田町)で焼かれた磁器で、黒い輪郭線を伴わない京焼風の絵付けが特色の「仁清手」と呼ばれるやきものです。本品は口径209mm、高さ35mmを測り、内側に金・青・緑の色絵で松竹梅と丸に揚羽蝶の文様が描かれ、金継ぎで補修が施されています。また、外側には内側から続く松枝や笹が絵

色絵丸に揚羽蝶紋付松竹梅文皿 図2-1



図1-2 側面(銅)



図1-3 印銘「御菩薩」

付けされています(図2-2)。

2つの絵皿は、意匠や文様、使用される色絵具が共通し、揚羽蝶紋の直径も45mm程度と規格が統一されていることから、両者は鳥取藩の御用品として御菩薩池焼の窯元に、それぞれ組皿として一緒に注文されたものと考えられます。このことは、仁清手のなかに今回見つけた御菩薩池焼の色絵磁器皿のように、京都へ運ばれた有田産の白磁に京焼窯元が色絵付する場合もあったことがわかり、仁清手の理解を前進させる新発見となりました。

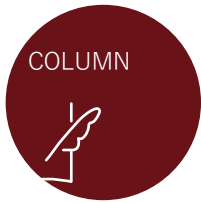
色絵皿の来歴

2つの色絵皿の来歴については不明な点もありますが、箱書きにより、元々鳥取藩士鷺見家の所有で、天保13年(1842)10月に藩主から拝領したものであったことが判明します。また、本来は伊万里焼の猪口も同伴していましたが、今は逸失しています。

拝領の経緯はよくわかりませんが、拝領した年の5月には10代藩主池田慶行が將軍徳川家慶の面前で元服し、9月に鳥取へ初入国を果たします。当時の鷺見家当主である勘解由は、藩主側近の御用人として元服や初入国御用に携わっており、その褒美として下賜されたものと思われる。藩の記録では、家老や側近などに下賜される藩主の道具類の多くは「御召」の品、つまり藩主が実際に使用したものです。そうすると、2つの色絵皿は藩主慶行が元服や初入国の儀式で実際に使用した食器であったと考えられます。本来は藩主の重要な人生儀礼において、祝宴の器類は新調すべきところ、当時は、質素儉約を旨としていたことから、歴代の藩主が使用した由緒品を用いたのかもしれませんが。

色絵皿は昭和9年までには鷺見家の手元を離れ、何人かの鳥取県内の収集家の手を経て当館の所有となりました。藩主の御道具は近代の売り立てで散逸しており、本品のように具体的な使用が推測されるやきものの存在は大変珍しいものです。2つの色絵皿は陶磁器研究史上だけでなく、鳥取藩の歴史を物語る貴重な逸品と言えるでしょう。

おおしま よういち
(学芸課 大嶋 陽一)



コラム

美術館のオープンに向けたふたつのプログラム “長ーい祭りの準備プロジェクト”と“しあわせのかたち”

2025年3月、いよいよ鳥取県立美術館が開館します。50年余りにわたる鳥取県立博物館美術部門での活動を引き継ぎながら、より幅広い美術／アートに触れる環境が充実する機会を心待ちにされている方々も多いのではないのでしょうか。2002年に美術振興課として活動を始めて以来、さまざまな展覧会や教育プログラムを通じてその普及活動に努めてきましたが、ようやくカウントダウンが始まり感慨もひとしおです。

美術館の基本構想の策定と同時に立ち上げた「アートの種まきプロジェクト」では、美術館と社会の未来について語り合う「ミュージアムサロン」や、“美術館ができるまで”をレポートするフリーペーパー『Pass me!』の発行、各種のワークショップなどを通じて、県民の方々と共に美術館のあり方を考える機会を設けてきました。誰かが勝手に作った美術館ではなく、プロセスに関わることで「わたしたちの美術館」として運営していくための土壌を作り、種をまくことが、美術館の未来に欠かすことができない、と考えたからです。

2022年秋、倉吉に開設した「HATSUGAスタジオ」の名前も、種から芽が出て、成長していくイメージに由来しています。県立美術館に整備される「スタジオ」や「ひろま」など、これまでになかった空間で期待される新たな活動の試行の場として、またアートを軸に人が集い、会話を交わし、経験やアイデアを共有するサードプレイスのな拠点として試行錯誤を重ねてきました。

ここでは、ふたつのプログラムが芽吹きつつあります。ひとつめは美術館の開館を記念して、まちを練り歩くパレードを準備する「長ーい祭りの準備プロジェク



「しあわせのかたち」ワークショップ風景(HATSUGAスタジオ)

ト」です。講師に宮原翔太郎さんを迎え、オープンミーティングやワークショップを重ねながら企画・運営するこのプロジェクトは、集まった人たちがアイデアや技術を持ち寄り、祭りを“手作り”しようとしています。吉岡温泉地区でかつて使われていた大型の屋台(山車)を譲り受け、この祭りのシンボルとして、装いを新たに美術館に登場する予定です。

もうひとつは、アーティストの独自の視点により見過ごされてきた地域資源を発掘し、その魅力を内外に伝える「アート・フィールド・リサーチ・プロジェクト」です。私的な記憶と記録に潜む価値に着目したアーカイブ・プロジェクト AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ] を招聘して実施するこのプログラムは、「県立美術館が人々の《しあわせ》とどのような関わりを結ぶことができるのか」という問いを起点に、リサーチやワークショップ、ディスカッション、読書会等を通じて「しあわせのかたち」を可視化することを試んでいます。このプロジェクトの一環として10月からは植物を育てた経験や記憶を集めるプロジェクトを開始し、《育てる》という営みを通じて浮かび上がるものたちをアーカイブとして開館後に発表する予定です。SDGs やウェルビーイングといった言葉が行き交う昨今、豊かさや幸福度を測る指標は経済的なものだけではないことに、世界は気づき始めていると言えるのではないのでしょうか。人口最少県の最後発の美術館で新しい価値観を提案するこの取り組みを、皆さんと共有しながら進め、来る日を迎えたいと思います。

あかい
(美術振興課 赤井 あずみ)



祭りのイベント「屋台、山を越える」開催の様子



コラム

博物館と学校を「つなぐ」— 博学連携イベント“教員のための博物館の日”

“教員のための博物館の日”とは

これまでも紹介したことがあります(鳥取県立博物館ニュース No.22)、当館では平成26年から「教員のための博物館の日」というイベントを毎年夏休み期間に開催しています。コロナ禍で開催できなかった年もありましたが、例年多くの教職員の方々に御参加いただき、大変好評いただいています。

このイベントの主旨は、ズバリ！「学校の先生に博物館に来てもらう」ことです。事前アンケートで「博物館に来たことがありますか？」という設問に、「ない」と回答される方が結構いらっしゃいます。こうした学校業務で多忙の先生方に、まずは博物館へ「無料でご招待」して、いろいろな学習資源があるということや、多彩な専門分野の学芸員がいるということを知っていただき、博物館を楽しんでいただくことを目的としています。

博物館を活用するには？

イベントの中では様々な博学連携の取り組みを学芸員が紹介します。昆虫の体のつくりから昔の道具やくらし、美術分野では対話型鑑賞のワークショップなど、授



(自然分野) 動物の体のつくりについての解説



授業等に活用できる昆虫標本



(歴史分野) 古絵図を使った鳥取の歴史解説

業単元に基づいてそれに見合った収蔵資料等をご用意します。コロナ禍ではオンラインでのコミュニケーション手法も発達したため、例えば収蔵庫と学校を結んで資料を解説するといった取り組みも行いました。

博学連携の可能性は“無限大”

興味を持たれた教職員の方は是非ご連絡ください。打合せに少し時間をいただきますが、その分授業の内容は発想力次第で変幻自在に膨らみ、可能性は無限大です。分野という枠を外せば、動物の標本や武士が使った兜を美術の教材にしたり、絵画から植物や動物の観察をしたり、様々な新しい気づきが生まれます。専門知識を持つ学芸員との対話の中で、可能性を探っていきましょう。

ちなみに、地域の公民館や児童クラブなど学校以外の団体からの相談も受け付けています。身近な興味が大きな学びに成長することも多々あります。その小さな第一歩として当館が協力しますので、まずはお問い合わせいただければと思います。

ちゃやみつる
(学芸課 茶谷 満)



(美術分野) 対話型鑑賞の体験

「鳥取藩池田家・姫君の婚礼道具」

会期 令和6年5月18日(土)～6月7日(金)
午前9時～午後5時 休館日:5月20日・27日

観覧料 常設展示観覧料(一般180円)

会場 鳥取県立博物館 第3特別展示室



(梅唐草蝶文時絵女乗物
鳥取県立博物館蔵)

江戸時代、大名の婚礼の場においては、乗物・挟箱・茶弁当・薙刀など格式に応じた各種の道具が必要とされました。今回初公開する7点の婚礼道具類は、梅唐草蝶文による金蒔絵や繊細な彫金による真鍮金具を用いた、豪華な装飾が挿いの意匠を施されていることから、江戸時代後期に、池田家の姫君の婚礼調度品として整えられたと考えられます。



女乗物に施された装飾

池田家の婚礼道具は、大正時代の売却による散逸や、戦災による焼失によって多くが失われているため、32万石鳥取藩の格式の高さを示すものとして貴重な資料です。

報告

全国博物館大会で博物館活動奨励賞を受賞しました

(公財)日本博物館協会発行の雑誌『博物館研究』2022年9月号に掲載された論文「公募型のオリジナル・ミュージアムグッズの開発とその反響」(若松杏奈 主事)が、令和5年度の博物館活動奨励賞に選ばれ、令和5年11月に千葉市で開催された第71回全国博物館大会で表彰されました。



表彰式の様子



＜受賞コメント＞

今回このような賞をいただけるとは思わず、とても光栄です。公募型オリジナルグッズの開発にご協力いただいた提案者のみなさま、県博職員全員で受賞した賞であると思っています。



休館のお知らせ

令和7年2月17日から2～4ヶ月の間、休館させていただきます。

鳥取県立美術館が令和7年3月に開館することに伴い、美術部門の移転作業と館内の資料移動等のため休館させていただきます。休館中は、ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力をお願い申し上げます。

鳥取県立博物館は、自然史、歴史、民俗、そして美術工芸(仏像、武具甲冑、刀剣など)の博物館として再スタートします。最新の情報はホームページ等でお伝えしていきます。新生「鳥取県立博物館」にご期待ください。

鳥取県立博物館ニュース No.37

令和6年(2024年)3月26日発行

編集・発行 鳥取県立博物館

住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地

TEL 0857(26)8042(代)

FAX 0857(26)8041

URL <https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/>

E-mail hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp



博物館 HP



美術部門

- 入館料:常設展/一般180(150)円
()内は20名様以上の団体料金
 - 開館時間:9時～17時(入館は16時30分まで)。一部、19時(入館は18時30分)まで開館の土日あり。詳細はお問い合わせください。
 - 休館日:毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日) 国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く) 年末年始(12月29日～1月3日)
- ※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



- JR鳥取駅からバスで
 - ①100円バス「くる梨」緑コース「①仁風閣・県立博物館」下車すぐ
 - ②ループ麒麟獅子「③鳥取城跡」下車すぐ
 - ③砂丘・湖山・賀露方面行「西町」下車、約400m
 - ④市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
- JR鳥取駅からタクシーで…約10分
- 鳥取砂丘コナシヨコから…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
- お車で…鳥取自動車道・鳥取ICまたは鳥取西ICより約15分
※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場【無料】へ

お客様の満足の笑顔へ…

MORRIX

株式会社モリックスジャパン

TEL 0857-23-3641

本社 鳥取市南深町2-03-6
倉吉店 倉吉市南町5-29 倉吉コミュニケーションセンター1-3号
<http://www.morrix.co.jp/>



日本通運株式会社 鳥取営業課
TEL 0857-28-0202